



TITLE:

社會哲學に於ける主意的二元論的思想(四)

AUTHOR(S):

恒藤, 恭

CITATION:

恒藤, 恭. 社會哲學に於ける主意的二元論的思想(四). 經濟論叢 1922, 15(3): 386-403

ISSUE DATE:

1922-09-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127941>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京 叢論濟經

號三第 卷五十第

行發日一月九年一十正大

論叢

マルクス氏の集産主義の實行難を論ず
 交通税の本質
 階級に就いて
 基督教文明の發展概論
 社會哲學の主意の二元論的思想

法學博士 田島 錦治
 法學博士 神戶 正雄
 文學博士 高田 保馬
 法學博士 財部 靜治
 法學士 恒藤 恭

時論

財産税論

法學博士 小川郷太郎

資料

小作爭議原因の研究

法學博士 戸田 海市

雜錄

フーガスの本能的社會觀
 我國の離婚率に就て
 定價制と正價制

法學博士 河上 肇
 經濟學士 岡崎 文規
 法學博士 河田 嗣郎

社會哲學に於ける主意的二元論的思想(四)

恒 藤 恭

十六

上來、近代の社會哲學における主意的思想の發展を概観し、特にホッブス、ヘーゲル及びシヨペンハウエルの三人の思想について、いくらか詳細な考察を試みたが、これらの三人の思想は、社會の本質の問題について、互ひに興味ある對照を成すものである。

ホッブスは、一切の實在を物體的と觀、一切の事象を無數の物體の運動と解する唯物論的見地から出發して、あらゆる社會的國家を成立せしめ存続せしめる原理を、經驗的個人的自我相互間に締結される社會契約に求めるところの、一元論的思想に到着した。それとは反對に、シヨペンハウエルは、多數の經驗的個人的自我の並立を以て、主觀の表象において成立する假幻的現象と考へ、その背後に、あらゆる個人的自我を、否一切の存在者を併せ包容しつつ、不斷の盲目的努力をつづける唯一の實體的意志を思念しながらも、社會の本質の問題の解決に當つては、現象的な存在者としての主我的個人を互ひに結合して、その間に秩序ある統一を可能ならしめる原理を、

ひとしく社會契約において發見するところの、唯心論的・二元論的社會觀を提立しなければならなかつた。一切の社會的なるものの存立は、本來唯一つなる絶對的意志によつて支へられてゐると思惟する點においては、ヘーゲルはシュopenハウエルと軌を一にするものであるけれど、後者の見地からすれば、一切の個人的自我の並存、従つて一切の社會的事物は、單なる表象の所産とせられるのと違つて、前者の見解によれば、一切の個人的自我の相互的交渉は、理念の發展の様相として、實在的意義を有するものと考へられる。且つ又シュopenハウエルの謂はゆる絶對的意志が、暗中暗索的な活動を永久に反覆するに過ぎないのに反して、ヘーゲルにあつては、客觀的理性が深く自己みづからの本性にめざめるところに、自由なる意志のはたらきが始まるのであつて、その働きは辨證法的形式を守りつゝ逐次に合理的發展の途をたどり行くものとされてゐる。かくて、ヘーゲルは、一方には、理念が特殊的自制的人格者の多數に分裂し、器械的抽象的原理によつて統一を保つてゐるところの公民的社會の本質を洞見すると共に、他方には、人倫的精神が直接なる、自然的なる形態において現れるところの家族と、人倫的精神が家族の階級から公民的社會の階段を経過して、これらの両者の構成原理の綜合により、眞正の自覺に到達せるものとしての國家とを、前者に對照せしめるといつたやうな、唯心論的・二元論的社會觀を展開したのであつた。

『主意的』(voluntaristische)といふ名辭を哲學の問題の考察に初めて用ゐたと認められてゐるテンニースは、¹⁾みづからも亦主意的哲學思想に立脚して、特有の社會觀を構成した。そして彼の思想の裡に、前記の三人の哲學者の思想の淺からぬ影響を、それぞれ指摘することが能さる。テンニースは、認識論の方面では、最も著しくホッブスの感化を被つてゐる。形而上學の方面では根本において、シヨペンハウエルの意志の哲學を想ひ起させるやうな主意的思想を把持しながら意志の理論の內面的構成の上には、ヘーゲル及びホッブスの學說に負ふ所が大である。そして社會の本質の問題については、ホッブスやシヨペンハウエルにおいて見られる個人主義的見解と、ヘーゲルによつて代表される超個人主義的見解とを併せ採擇して、獨自の折衷的見解を形成してゐる。歴史哲學の方面では、ヘーゲルの辨證法的發展の思想の影響を受けつゝも、シヨペンハウエル風な嗟嘆的感情をみなぎらせてゐる。

社會の本質を主意的見地から闡明し、社會的結合に協同體(Gemeinschaft)と社會體(Gesellschaft)との二つの原型の存する點を力説するテンニースの思想は、國家と公民的社會とを鋭く對立せしめるヘーゲルの思想から暗示を受けてゐるものと言ひ得られるが、この暗示は、マルクスの社會觀を通過することによつて、より力強く傳へられたと見るのが正當であらう。テンニースが、前記の二個の社會的 prototype の對立の根柢を、深く社會的經濟生活の內面に求めてゐる點は、右の推定

1) cf. Eisler, Philosophen Lexikon, 1912, S. 762.

を確かめると共に、マルクスからの理論的感化の大きさに想ひ到らせるものであるが、前者が協同體の精神としての共產主義の文化的意義を高調するのは、素より根本において後者の社會思想に共鳴する所があるからである。

テンニースの二元論的社會觀は、社會生活に關する經驗的知識に負ふ所が尠くないことは、論を俟たないけれど、認識論における合理性と非合理性との二者の對立の問題についての彼の特有の見解との間に、内面的關聯を存することを看過すべきではない。しかもこの方面におけるテンニースの見解は、ホッブスからの著しい影響の下に立つてゐることは、前述した所である。

形而上學におけるホッブスの唯物論的思想は、認識論における唯名論的思想と提携してゐる。

彼の見解によれば、實在の本體は、原子的物體であり、官能的知覺によつてのみ認識し得られる然るに官能的知覺は恒に個別的なるものゝ表象をあたへるけれど、普遍的概念を示すことはない後者は、思惟が同一の名辭の下に數多の個別的表象を總括することによつてのみ成立する。かやうにホッブスは一方には認識の根源の問題に關しては、經驗論の見解をとりながら、他方學識の方法については、唯理論の見解に左袒してゐる。數學的方法是、彼が學的方法の典範とする所であつて、社會的事物に關しても、數學的方法に類似せる抽象的唯理的方法によつてのみ、眞實の學的認識を全及し得るものと考へた。かやうに非合理的なる實在の世界と、合理的なる觀念

の世界とを峻別し、學的認識の妥當の範圍を第二の世界に局限しやうとするホッブスの思想は、根本においてテンニースの世界觀の方向を與へてゐる。唯後者にあつては、實在の本體は多元的な意志によつて置き換へられ、實在の世界と觀念の世界との對峙は、意志の世界と思惟の世界との對峙を意味するものとされてゐる。しかも實在的意義においては、思惟は決して意志から獨立な機能ではなく、飽く迄も意志に倚屬すべきものと考へられてゐるから、觀念の世界と雖も、本來は意志の所産であるとされる。而して實在の世界が個別的であり、多樣的であり、非合理的であるに反して、觀念の世界が普遍的であり、齊一的であり、合理的であり得る所以は、個人にとつては、彼の意志が、特定の名辭を以て、一團の個別的表象を代表せしめ標示せしめることを決定し、この決意に従つて思惟の作用をいとなむからであり、個々の概念が超個人的なる妥當性を有し得る所以は、同じやうな決定が社會的意志によつて支持されるからである。學的認識も斯かる社會的意志の働きによつてのみ可能であり、その存立の基礎は、吾々人間が先天的にその可能性をあたへられてゐる思惟の共同態に存するのである。²⁾——實在の世界と意味の世界とをやうに峻別する考へ方は、やがてテンニースの二元的社會觀の成立する根本的契機をあたへるものであるが、その間の消息を明かにするには、先づ人間の意志の本質に關する彼の思想を検討することを要する。

2) cf. Phil. Term., SS. 6 ff., 29 ff.; G. u. G., SS. XX ff.; Das Wesen der Soziologie, 1907, S. 18; Zur Einleitung in die Soziologie, S. 241.

十七

ランニースは、その著「Philosophische Terminologie」において Wille という名辭が、通常學問上使用される場合に、それに賦與される意味を考察してゐるが、それによれば、意志といふ語は、或は何等か活動するもの (etwas Tätiges) を意味し (文法上の主語)、或は何等か活動をうけるもの (etwas Leidendes) を意味する (文法上の客語)。前の意味においては意志、(1) 意志は精神一般の觀念とひとしきか、(2) 外部より受容する精神としての知性 (Intellekt) と對照させられて、外部に對し作用するものと思惟される限りに於いての精神の觀念とひとしきか、(3) 特に、支配するもの、命令するもの、指導するもの、身體の運動を生ぜしめるものとしての精神の觀念にひとしきか、いづれかその一である。後の意味においては意志は、何等か思惟されたもの (etwas Gedachtes)、思想 (ein Gedanke) 又は思想の複合 (ein Komplex von Gedanken) である。だから前の意味の意志の觀念は、ある身體が精神をそのうちに有つてゐると思惟されるところでは、いつも適用し得られ、少くともすべての動物的有機體に對して適用し得られるに反し、後の意味の意志の觀念は、人間に對してのみ適用し得られる。けれども此れらの二つの觀念は交錯する。精神一般 (die Seele überhaupt) と同様に、意志は一方には理知 (die Intelligenz) と同視され、又は

何等か理知的なるものとして規定される。この場合には、理知的思惟との對立において、理知的『本能』の概念が発生し、例へば本能が動物をみちびくとか、本能が動物に教へるとか、語るとか謂はれる。他方には意志は、思惟する自我の所産として、後者が命令を發し成就するための手段と同視される。この場合には、ややもすれば意志は思惟する自我と同視される、かやうな考へ方は、『自由』意志の感情なり觀念なりに最も良く照應する。主語として考へられるにせよ、客語として考へられるにせよ、意志なる名辭によつて表白さるべき觀念は、つねに未來に對し、生成(ein Werden)に對し、即ち直ちに生起(ein Geschehen)に對して關係をもつ。けれどもこの觀念は、容易に一般化されて、有る所のもの(das Seiende)にも關係せしめられる。その際共通なる要素は、ある狀態又は變化の肯定及び否定である。茲において、意志の觀念は、快及び不快の感情と同一となる、しかるに前者は、欲望及び嫌厭、希望及び恐怖、即ち——更に未來の狀態の感覺、表象、思惟によつて制約されるところの——一切の積極的及び消極的『希求』(Wünschen)と、不可分的に結合せるものである。かくて普通の用語例に従へば意志は、個々の結合された感及び覺思惟と同視されることも能きし、それから區別されることも能きし、即ち全く非論理的なるもの、直接的なるもの(固有の恣意又は隨意)として概念し得られると共に、それとは反對に、嚴密に論理的なる、體系的なる形象としても概念し得られるわけである。¹⁾

意志といふ名辭の通常の用例は、以上の如くであるとして、テンニースみづからは、如何様に意志の概念を規定してゐるのであらうか？、彼はいふ、人間の意志は本來何であるかといふことを探究することは、永久に徒勞に了る。事實の根本的洞察を獲得することこそは、唯一の重要な任務といふべきである。斯かる見地から人間の意志の概念を定義するならば、意志とは、それに次いで起る觀念又は觀念結合に對し、何等かの仕方で定立的 (statische) なるところの又は作用をあたへるところの一切の觀念結合 (思想及び感情) である。この意味において人間の意志は人間の活動又は自覺的不作為の原因として思惟し得られる、何となれば、活動及び自覺的不作為は、心理的には、觀念 (Ideen) の繼起として理解される外はないのであるから――生活感情及び動物において身體の組織を伴うて發達するところの、多様な有機的活動感情について見るに、各者は生命のすべての現象と同様に、二重の様相を示すものであつて、一方には、同化的、受容的、肯定的たると共に、他方には、排斥的、抗拒的、否定的である。動物の生活々動においては、筋肉組織との間に原本的統一を保つところの神經組織の生活々動が、外的刺戟によつて生ずる原動的變化の支持者として、際立つた特色を有する。これに應じて、生活感情の統一は、それと同種類の、原動的の感情と、著しく修正され、無限に多様化されるところの、外的刺戟に對する反應の感情、即ち感覺 (die Empfindungen) との二つに分裂する。この動物における分化は、原

本的、植物的分化と類似せる點はあるけれど、符合するものではない。然るにかやうな過程は、感覺のより高い發達においては、甚だ特有な仕方で反覆される。身體の内部において大腦皮質が構成されるやうに、精神の内部において心的組織が、感覺の可能的及び現實的結合として構成される、この組織の主たる機能は、類同及び差別の定立、即ちまさしく同化と排斥、受容と抗拒、肯定と否定とに存する。而して該機能は、人間にあつては、言語の符號體系の所有により、判斷の機能にまで發展し、それによつてまた思惟の機能にまで發展する。³⁾二重の方向に發動する有機的生命感情こそは、生物的意志一般の本質を成すものであるが、人間の意志の特性は、客體——對象又は活動——の思惟的(『意識的』)肯定又は否定たる點に存する。但し對象の肯定及び否定は、いつも活動の肯定及び否定に歸し得られる。肯定(Bejahung)は、對象を保持し又は領得し、定立し又は所持せむとする意志であり、従つてまた對象を產出し、創造し又は惹起し、構成し又は製作せむとする意志である。之に反して否定(Vernichtung)は、對象を否定し又は拒斥し、破壊し又はその本質的性質を奪取しやうとする意志である。⁴⁾

十八

テシニースの意志説の重心は、全く人間の意志の二元的形式の理論の上に置かれてゐる。そし

3) ibid. SS. 68-69.

4) Zur Einl. in die Soz. S. 249.

て彼の二元的意志説は、認識の問題に關する彼の經驗論的、唯名論的思想に根源を有するものだと同時に、彼の特有の社會觀に對して基礎をあたへる所のものである。

或は個人に具はる主我的もしくは利己的性情を基本原理とし、或は個人に具はる沒我的もしくは利他的性情を基本原理とし、更に或は此れらの兩者を併せて基本原理とし、以て社會と個人との關係の問題を、個人的心理の側面から考察し解決しやうとする思考方法は、極めて古い時代から採用された所である。もとよりテンニースは、この問題を單にその心理的側面からしてのみ考察しやうとするものではないが、しかも古くから用ひ慣らされた思考方法に新しい根柢をあたへ、新しい仕方で之を利用すべく、努力を試みてゐるといふことが能きやう。

前にのべたやうな一般的屬性を有するものとしての意志について、テンニースは二つの根本的種別を立てゝゐる、實體意志 (Wesenswille) 及び形制意志 (Willkür, Kriville) が即ちそれである。(註) 人間の意欲にかやうな種別を設けることも、從來一般の言語、詩、傳記、歴史などにおいて非體系的に行はれ來つた所であるが、これに對して概念的形態化をあたへたのは、自分を以て嚆矢とする、そしてこの種別の定立については、倫理的歸結が連想され易いけれど、自分は一切の倫理的歸結を顧慮することなく、それ自らを問題としたのであると、テンニースみづからが述べつゝゐる。

1) Zur Einl. in die Soz., S. 251-cf. Barth, Die Philosophie der Geschichte als Soziologie, 2. Aufl., 1915, S. 407

註 テンニースは初め „Gemeinschaft und Gesellschaft“ の第一版において Wilkür といふ語を選んでから、久しくそれを使用してゐたが、この書の第三版においては、彼の獨自の概念をあらはす用語たることを明かにするために、Kontingenz といふ新造語を用ゐてゐる (cf. G. u. G., 3. Aufl., Vorwort)。Wilkür といふ語は、從來學問上特殊の意味を附して用ゐられた語であるから、テンニースがそれを使用することを避けたのは、適當な仕方であると思ふ。

人間における一切の精神作用は、²⁾ 思惟がそれに參與してゐるといふ點に、その特徴をもつ。そこで、その中に思惟が含まれてゐる限りにおいての意志と、その中に意志が含まれてゐる限りにおいての思惟とを區別することが能きる。各者は、その裡に感情、衝動、欲望の多様が統一をあたへられてゐるところの關聯ある全體を示すものである。但しこの統一は、第一の概念においては實在的 (reale) 又は自然的 (natürliche) であり、第二の概念においては觀念的 (ideelle) 又は人爲的 (gemachte) であるを理解されなければならぬ。前の意味における人間の意志を、テンニースは實體意志と名づけ、後の意味におけるそれを、形制意志と名づける³⁾。しからば彼が實在的又は自然的統一と謂ひ、觀念的又は人爲的統一と謂ふのは、何を意味するか問題となるわけであるが、この點を明かにするに先立つて、テンニースが、實在意志及び形制意志と謂ふ所のもの自体の何たるかを吟味しなければならぬ。

實體意志は、人間の身體の心理的對當者である、又は思惟其者が實在として成立する形式と同じ實在の形式の下に生命が思惟される限りにおいての、生命の統一の原理である。宛も、それ

2) 意識といふにひきとい (cf. ibid., S. 249).

3) G. u. G., S. 99.

の激搖が思惟に對應する生理的活動として表象され得るところの大脳の細胞を身體の組織が包含するやうに、實體意志は思惟を包容する。しかるに形制意志は、思惟その者の形象 (ein Gebilde) であり、従つて後者の制作者——思惟の主體——との關係においてのみ、固有の實在性を有する但し他の者がその實在性を承認することはあり得る。實體意志を包容する意志であり、形制意志は、思惟されたものとしてのみ存在する意志である。これらの二種の意志の概念に共通な點は、いづれも活動への原因もしくは傾向として思惟され、従つてその存在及びその性狀からして、その主體の特定の舉動を、蓋然的なるもの又は事情によつては必然的なるものとして、推理し得ることに存する。唯實體意志は過去のものに根柢を有し、後者からして説明されること、恰も生成するものが實體意志からして説明されるのと同然である。之に反して形制意志は未來のものに關係せしめられ、後者からしてのみ理解し得られる。

實體意志が、その關係するところの活動 (die Thätigkeit) に對する關係は、力が、その作為する勞働に對する關係と同様である。だから、個性的人間的組織を主體とするところのあらゆる活動の中には、實體意志の何等かの形態が、まさしく心理的意味において斯かる個性を構成するものとして、必然的に定立されるわけである。すなはち實體意志は運動に内在するのである。その本質を把握するには、外的對象の一切の獨立的存在を考へから除き去り、それについての感

覺又は經驗を、主觀的實在性においてのみ理會しなければならぬ。かくすれば、心的實在性及び心的因果性のみが残存するであらう、換言すれば、その總體及び關聯においてその個人的實體の原本的胚子的素質から發生するものとして思惟されねばならぬところの、存在感情、衝動感情の並存や繼起だけがあたへられることとなるであらう。それとは違つて、形制意志は、その關係するところの活動に先行し、後者の外面に終始する。そして形制意志その者は、思想の中に定立された存在 (ein in Gedanken gesetztes Dasein) を有するに過ぎないけれど、前者は後者に對してその實現として見られるのである。両者の主體は、(茲では非自動的と表象されるところの) 身體に對して外的衝撃をあたへて、之を運動せしめる。但しこの主體は抽象物である。他の一切の屬性をとり去られ、主として思惟するものとして、即ちそれ自身から出づる可能的動作の結果を表象し、之を或る有限的成果の標準により測定するものとして概念された人間的自我である。かやうな概念に従へば、思惟は、宛かも器械的強制を加へるかのやうに、神經及び筋肉の上へ作用し、それを通して身體の四肢に作用する。しかるにこの表象は物理的又は生理的見地においてのみ形成し得られるのであるから、茲では思惟その者も運動として、即ち腦の機能として理解され、腦は空間をみたし客觀的に作用する物として理解さるべきである。⁵⁾

5) *ibid.* II, § 3.

十九

實體意志は人の身體の心理的對應物であるから、實體意志としての意志の問題は、有機的生命その者の問題と同様に複雑である。個々の實體意志は、それによつて提示される組織とひとしく、一定の心理的及び物理的定性をそなへた胚子から、目につかぬ生長を遂げつゝ發展する。だからその根源の上からは、それは生有的なるもの遺傳的なるものとして理解さるべきであるが、父母の素質の混合及びそれに影響する環境の特殊性に伴ふて、新しく獨自の實體意志として發展する原理をそなへてゐるものと言はねばならぬ。實體意志の生長は身體の發展の各階段に對應し、且つ後者とひとしく、自己活動的のものと考へられねばならぬ。従つて意志は身體と同様に瞬々にその内容を變更するわけであるが、意志の個性的成立その者も意志動作の繼起と視得られる、そしてこれらの意志動作の各個はそれに先行する一切の意志動作と外的刺激の一定の性狀とを前提するものといふべく、更に一切の先行する意志動作は、原初の素質、即ち原意志 (der Urville) に歸する。この原意志は、論理的可能性としてではなく、實在的可能性として、すべての意志動作を一定の仕方で包容するものであり、該可能性は、やがてあたへられた條件の下に必然性に化し、實在性に到達するのである。¹⁾

1) G. II. G., SS. 101-103.

動物の機關及び機能を最も一般的に分類するときは、植物的(內的)生活のそれと、動物的(外的)生活のそれとの區別が立てられる。同様に十分な理由を以て、植物的意志(vegetativer Wille)と動物的意志(animalischer Wille)とを分つことが能きる、そして両者は動物の意志において結合され、互ひに規定し合ふものと考へらるべきである。斯かる結合は、人間の特殊の性質及び活動においては、極めて特有な、顯著な仕方で行はれるところから、人間意志又は精神的意志(der humane od. mentale Wille)を植物的及び動物の意志から區別し、且つ後の二者が一般の動物の身體において結合されると同様以上にの三者が人間の身體において結合されるといふやうに思惟することが、必要とされるのである。植物的又は有機的意志の活動は、受容される又は感覺される刺激一般(物質的刺激)によつて制約され、動物的意志は知覺又は心象感覺(官能的刺激又は運動刺激)によつて制約され、人間の意志は思想又は言語感覺(もはやその物質的價值又は運動價值によつて評價すべからざる知的又は精神的刺激)によつて制約される。すべての他の生活の根柢に存し、みづからを實體的に保持しつつ、すべての特殊の活動をその態様又は表白となすところの植物的生活は、それに固有なる又はそれに適應する力並びに形式の維持、蓄積及び再造としてのみ成立する。それは已れみづからとの關係における存在及び作用であつて、物質の同化、營養分の循環、機關の維持更新がそれのはたらきの全體である。動物的生活は主として、以上の働きのため

に必要となり、自然となつたところの外部的運動であり、他の物との關係における力の費消、即ち全身體又はその分肢の動的變化のためにする筋肉組織の神經昂奮及び收縮を意味する。次に精神的生生活の特徴は、傳達、即ち標號 (Zeichen) による他人への働きかけ、殊に言語の發聲のためにする發音機關の使用に存するが、それからして自己みづからに對する傳達、即ち思惟が發達するこれらの三者の中で、後なる者はいづれも前なる者の改容と考へらるべきである。

人間的實體意志においては、右の如き三種の意志が會合して統一を呈示する。それは、動物的精神的意志によつて規定された有機的意志であり、有機的及び精神的意志によつて同時に表白された動物的精神的意志であり、有機的動物的精神的意志によつて制約された精神的意志その者である。すべての動機は、終局において有機的生生活に根ざし、精神的生生活においてその方向と嚮導とは特有の形式をあたへられ、動物的生生活において顯著なる且つ常習的な表現を受けるのである。²⁾

(註) 人間的實體意志は三種の形式においてあらはれる、快意 (Gefallen) 慣習 (Gewohnheit) 及び記憶 (Gedächtnis) がそれである。動物の一般の本能が人間において、一定の對象及び一定の活動に對する生有的快感としてあらはれるものを快意といふ。胚芽的素質と共にあたへられた心理的體制の發展生長によつてのみ説明し得られるところの一切のものは、決意によつて説明される。この體制といふのは、人間の全生生活、全努力にわたつて支配する有機的衝動の複合を指すのであつて、一切の個の觀念又は感覺は、斯かる原本的統一からみちびき出され、互ひに必然的な關聯を保つのである。この統一は三様の屬性において概念される。その一は生生活への意志その者である。即ち生活を促進する活動又は感覺の肯定、生活を妨礙するそれ

2) ibtd. SS. 104-105.

の否定である。その二は營養及びそれに關係ある活動又は感覺への意志である。その三は繁殖への意志である(G. H. G. S. 106)

實體意志の第二の形態たる慣習は、経験によつて發生せる意志又は快感である。本來は無關心的又は不快適なる觀念も本來快適なる觀念との聯想及び融合により、それみづから快適となり、遂には生活循環のうちに入り行くのである。経験は慣行(habit)であり、慣行は茲では構成的活動ないとなむ、はじめは慣行は發展の中に包容されて居り、前者が後者から分たれ、特有の因素となる次第も、發展から説明されなければならぬ。發展は通常容易であり、確實であり、普遍的であるが、慣行は初めは困難であり、數多き反復によつて容易となり、不確實な不定な運動をして確實ならしめ、特定せしめ、特殊の機關なり力の貯へなりを構成する。動物は先づ生活活動に直接に關聯せる對象及び享樂に習熟するが、次には生活に必要な、そして特殊の知覺によつて條件づけられた運動、勞働に習熟する、更にはその際はたらしかけ又は呼び起されることの、知覺や表象の經過及び關聯に習熟する。人間においても、それに照應して生活慣習、勞働慣習、表象慣習が區別し得られるが、これらの三者は無數の相交又す連鎖によつて結合されてある。(G. H. G. S. 108-109)

人間時實體意志の第三の形式としての記憶は、第二の形式の特殊の進化であつて、人間において著しく完成せる脳中枢との關係に依いて同一の内容を有するものであるが、しかも意志一般の固有の性質は、記憶において最も明瞭に現れる。通常の語義においては、記憶は印象を再造する能力であり、科學的概念においては一般化されて、合目的な活動を反覆する能力を意味するが、此事たる、印象(Inductive)その者が活動たること、この二重性が有機的生活の概念のうちに營養及び再造の統一として未だ發達せないままに包容されてあることを知るに非ざれば、理解する能はざる所である。この統一は、一部は發展の中に包容され、一部は慣行によつて成長するが、更にはより修得(Etude)によつて保持される特殊の結合となつて現れる。修得は経験でもあり、模倣でもあるが、正しく且つ善なるためには何を爲さればならぬか、如何なる物が有益且つ有價值なるかについての知識及び教訓の受容たることを、その特色とするものである。そして正しきもの、善なるものを知り、以てそれを愛し且つ行ふといふのは、記憶の眞實の意義である。けたしあるものの正しく且つ善なることを知る事と、

それを肯定することは同一事だからである。記憶は精神的生涯(das mentale Leben)の原理であるが、後者の一般的表现は談話(Dialog)即ち自己の感覺、希望及び一切の可能的知的經驗の他人への傳達、又は默考による自己みづからへの傳達である。そして語られる所の内容は、思惟によつて左右されるといふよりは、むしろ話者の狀態及びあたへられた事情(相手の談話要求、疑問)から發生するところの瞬間的快意によつて決定されるのを常とする。同様に習熟された觀念の集團は、想像又は記憶の機能として著しいはたらきを營むものである。なほ又ある觀念については、その結合その者が記憶を伴ふものがある。即ちそれを識別し、その價值を認知するために、回想又は特別の思想を必要とし、標準又は秤量を必要とするものがある。想像、記憶又は理性により條件づけられる人間の一切の勞働は、これらの點について、談話とその趣をひとしくするものである。——感性の快意に對する關係、悟性の慣習に對する關係と同様の關係を、言語、思惟及び思惟的行爲の能力としての理性は、記憶に對して有する。そして記憶は同時に精神的快意及び慣習であるとするれば、慣習は低級なる(動物的)記憶であり、決意は原始的(有機的)記憶である。(SS. II-114)